

【論文】

チャールズ・ドジスのロシア旅行記(2)¹⁾

笠井 勝子

Charles Dodgson's Tour of Russia (2)

KASAI, Katsuko

要旨：本稿は、1867年にドジスがロシアへ旅行をしたときの日記研究の第2部である。第1部は『英米学研究』（文教大学女子短期大学部）第31号に発表した。ドジスの日記のMS（手書き本）はノートの形態で9冊が残っており、英国の大英図書館が所蔵している。ロシア旅行の日記は同じノートの形態ではあるが独立のノートに書かれて米国のプリンストン大学図書館が所蔵している。本稿はマクロフィルムでMSを使用した。本稿では次の3点を検討する。（1）ロシア旅行記はドジスが自分の日記の記録として書いたというよりも人に読ませることを考えていたと思われる。（2）人に読ませるという意図から、平生の日記には見られない『不思議の国』の作者らしいユーモアが見て取れる。（3）マイクロフィルムの日記と1999年に英国ルイス・キャロル協会が出版した印刷本の日記について、テキストの比較を行う。

キーワード：C. L. ドジス、ロシア旅行記、ルイス・キャロルの日記、H. P. リドン、1867年

1. テキストについて

チャールズ・ドジス（1832-98、筆名ルイス・キャロル）の書いた日記は全部で13冊あったが、ドジスの死後に紛失したものが4冊ある²⁾。本稿で取り上げる「ロシア旅行記」は1867年7月から9月にかけて2ヶ月にわたる旅で、その記録は上記の13冊とは区別して独立したノートに書

かれた。本稿では現在プリンストン大学図書館に所蔵されているオリジナルのMSのマイクロフィルムを使用した³⁾。「ロシア旅行記」を除く平生の日記のMSは大英図書館が所蔵し、こちらもそのマイクロフィルムを使用した。

ドジスンが日記を記録したノートは、罫線のない小型縦長（11.6cm × 18.3cm）で、表紙裏の左肩に sold by W. Emberlin, Oxford. のシールが残っている。サイズは大英図書館の実物を手にとってみたとき⁴⁾に控えたもので、プリンストンの方は実物を見ていないが、*Lewis Carroll's Diaries* vo.5の編者は、「大きさは平生の日記帳と同じで、それより薄い」と記している⁵⁾。旅行で記録する期間が2か月程度と短いためドジスンは薄いノートを選んでいたのである。

彼にとっては初めての外国旅行（結果的に1回限りの最初で最後）の見聞をしたため、平生の日記とは異なって人に見せる意図で書いたらしい。これについては、後述する。

2. 「ロシア旅行記」について

オリジナルの「ロシア旅行記」はDodgson Family Estateからアメリカ人の蒐集家 Morrish Longstreth Parrishが入手し、その後パリッシュコレクションはプリンストン大学が図書館基金⁶⁾などを利用して買い取った。現在は大学図書館のSpecial & Rare Collection部門のなかにあるFirestone Libraryとよばれる部屋に陳列されている⁷⁾。パリッシュはドジスンの没後30年にあたる1928年に「ロシア旅行記」を*Tour in 1867*というタイトルで限定66部を印刷した。プリンストン大学図書館では、「ロシア旅行記」のMSを*Tour in 1867*の名で登録している。

Russian Journalという通称は、大英図書館にある平生の日記が表紙にドジスン自身の手で、*Private Journal*と書いてあるところから、同図書館にはないロシア旅行の日記を指して、そのように呼んだと推測される。

チャールズ・ドジスのロシア旅行記(2)

ロシア旅行記のMSは2冊に分かれ、それぞれ右頁の右肩にドジスの手で通しの頁番号が記入してあり、向かい側の左頁は補足の書き込みに使用され、頁番号は入っていない。それによると1冊目の最終頁が93(8月15日)の記録の途中で終わり、センテンスの半ばから第2冊目に移って、2冊目の最終頁は39となっている。Denis Crutchが再編纂したWilliams, Madan, Greenによる*The Lewis Carroll Handbook*では、二冊目の最終頁を誤って30としている⁸⁾。2冊目の表紙はローマ数字で と書いている。1冊目については、マイクロフィルムに収められている表紙は‘Photographs 7 1/4 x 6 1/4’と手書きしてある。文字は、日記の本文のような連続書体ではなく1字1字分けて書かれているために、ドジスの字体と断定はし難いが、ドジスの手で書かれたと考えられる。ちなみに平生の日記の一部にみられるような線を引き抹消している部分はない。ロシア旅行記の表紙が何故「写真集」なのか。写真を貼る予定にしていたノートを日記に転用したのか、あるいはマイクロフィルムを撮影する際に、他のMSの表紙を誤って撮影して入れたのか。

モートン・コーエンは、ドジスを誘ってロシアへ行ったヘンリ・パリール・リドン(1829-90)の日記*The Russian Journal-II*(1979年)を編纂し、初めてリドンがドジスにロシア行きの話をしたのは、1867年7月4日であると、序のなかで述べている⁹⁾。ドジスは日記のなかでは1867年7月11日に、パスポートをロンドンから受け取ったとしてモスクワ行きのごとに初めて触れている。それは出発する前日のことで、ロシア旅行の日記はその翌日、7月12日から始まっている。

3. 読み手を想定した日記

*Tour in 1867*のMSは、ドジスの私的な記録というよりも、むしろ人に見せるために書いたようだ。その理由を考察したい。先ず、平生の日記はレファレンスのために記録しておくという目的があった。例えば『不思議

議の国のアリス』の執筆までの記録や出版記録を付け（1864年9月）、掲載した新聞名と日付、贈呈先の記録を付けて（1864年9月）いるのは、ドジスン自身に必要な事項を記録したものである。しかしロシア旅行の日記については、初めての外国旅行に出た心の高揚が文面に表れ、見聞したことを詳しく書き、ときには誇張してユーモラスな表現で描いていることがあり、それは平生の日記にはあまり見かけないことである。第二の特長は、見聞したことや経験したことに関しては、目前に見えるように詳しい描写がある反面、不愉快な内容は書くことを避けている。これは読み手を想定した思い遣りであろう。不愉快な内容を避けていることが分かるのは、一緒に旅行をしたリドンが付けた日記（*Russian Journal II*, edited by Morton N. Cohen, 1979）と比較してみるとわかる。例えば、宿泊したホテルについてリドンは *Russian Journal - II*, p.21 で、there were capital dinners and bedrooms and waterclosets, filthy beyond description と書いているが、ドジスンは、‘The feeding was very good, & every thing else very bad.’と書くに留め、そのひどさがどういうものかについては語っていない。

また、旅行中は二人で共通の支払いに当てるために「共用の財布」(common fund) を作っていた¹⁰⁾ ことについてドジスンは触れていない。リドンの日記によれば、旅行を開始して2日目の7月14日に established a common fund と書いて、翌15日には、Found that 2.50 francs were missing from the common fund という記録がある。モスクワに滞在中の8月14日に二人はクレムリンの門の向かいにあるレストランで食事をした。リドンの記述は、A regular Russian dinner - and Crimean wine. I am ashamed to say that it cost 5 roubles. とワインが高いことに内心憤慨しているが、ドジスンの方は至って大様で、出てきた料理の名前をコースの順にロシア語で、次いで英語での読み方と料理の内容を説明したうえで、ワインについては、The Crimean wine was also very pleasant, in fact the whole dinner (except perhaps the sturgeon concoction) was a very good one. と書いている。

この旅行中にリドンは幾度も体調を崩していた。特に初めの頃は夜半に

ドジスが医者と呼ばせたほどに胃痛と痙攣に苦しんだことがあった(7月23日)。7月25日には英国を離れなければよかったとリドンは日記に書いている。しかしその直ぐ後で、「旅行中にはこれまでににもよく具合が悪くなっていた。それでいて時が経つと苦しいことはみんな忘れてよいことだけが思い出されるものだ」とも書いている。そのよいことだけをドジスの日記は記録しているようだ。

旅行中のふたりは普段はゆっくりとできない話、それもかなり突っ込んだ議論(教会に関する問題)を合わせて6回していることがリドンの記録から分かる。7月19日にはA discussion with him on our way home as to the duty of maintaining the rule of saying the Daily Morning and Evening Service. この時にはdiscussionで、いろいろな角度から検討したと思われる。翌日20日にはA long argument with Dodgson afterwards about the obligation of the daily Service - an obligation which he fiercely contested. 二人は日々の礼拝の勤めについて長いこと理屈を並べ自分の言い分を主張し合った。7月28日にはAfter church a long argument with Dodgson. 内容については書いていないが、前回同様にやはり長いこと自分の言い分を主張し合った。8月13日には、A great argument with Dodgson on the character of Russian religion - he thought it too external, etc.と、徐々にエスカレートして「論争」になっている。翌14日はI had a warm argument with Dodgson about Prayers for the Departed: he appealed as usual to the general practice of the actual church of England. 「故人のための祈りについて熱い議論をした」と、感情の高まりが生じる。一般に「故人」というのとは別に、ドジスは1851年に彼が19才の学部入学時、またリドンは1849年彼が20才の時に母親を失っている。「いつものように」というリドンのことばから分かるように、ドジスの拠り所は「英国教会が行っているところ」にあった。旅行中最後の議論は9月1日にあったカトリック教会の礼拝に関するものである。Some discussion with Dodgson in the Evening. He thought the Roman Catholic Church like a Concert-room --- and went out. Disliked the name Catholic because

it connected us with Rome. ヨーロッパの旅先では英国国教会が無い土地も多くモスクワを出てパリへ向かう帰途のドレスデンで、この日二人はカトリック修道院教会のミサに出た。ドジスはそれがまるで演奏会のようなと言って、途中で外へ出てしまう。リドンは「普遍の意味でもカトリックというだけで、ローマと結びつけてしまうのだから」と、ドジスの頑なさを仄めかすように書いている。分裂している教会の融和、統一のために働いているヘンリー・パリー・リドン、彼の父親は海軍大佐で、母親と父方のおば共に熱心な福音主義の信仰を持ち彼を育てた。しかしリドンは17才でオクスフォード大学に入学すると同時にオクスフォード運動の指導者であったジョン・キーブルとエドワード・ブーヴァリ・ピュージーの思想に共鳴し、リドンの説教は多くの人を引付けて、説教者リドンの名はロシア旅行の当時、ヨーロッパにも知られていた¹⁾。そのリドンと、英国国教会に満足しきっているドジスとは、カトリックについて意見の分かれるところである。ドジスの日記は二人で行った教会内部の装飾や儀式については詳しい描写をした後に、英国国教会は飾りがなくシンプルでよいと書いている the more one sees of these gorgeous services, with their many appeals to the senses, the more, I think one learns to love the plain, simple (but to my mind far more real) service of the English church (7月28日)。建物や内部の装飾について書いたドジスもリドンとの間で考えるとところに相違があり議論を戦わせたことについてはなにも書いていない。

ドジスがロシア旅行の日記を人に見せるつもりで書いたという第三の根拠は、8月19日の記述のなかで自分を the writer (筆者) と称していることである。それは、寝台券を持って乗った夜行列車のコンパートメントで他に乗客が一人いて、その人は知名人にみえた。そこで一番若いドジスは二つのベッドをリドンとこの人物に譲り、床に寝ることになった、という場面である。as the third bed, which naturally fell to the lot of the youngest, the writer, was situated immovably cross-wise, with the head under one bed, and the foot under the other - I preferred air and fatigue, on the platform at the end

of the carriage, to rest and suffocation within. 「第三のベッドは、自然のなりゆきとして一番若年者、すなわち筆者の割り当てになる。そこは頭が片方のベッドの下に入り、足はもう一つのベッドの下に入れて、それ以外には持っていきようがない。結局、車中の窒息と休息よりも、列車の最後部にあるデッキに出て新鮮な空気と疲労の方を選んだ」。ここでは一人称ではなく the writer という三人称で書いている。

人に読ませるために書いたと考えられる根拠の最後に、ドジス自身が後年の日記(1871年7月18日)のなかに、「ロシア旅行記を持っていった」(貸してきた)と記していることである。Went up to town for the day. Called at 1. Mansfield St. to take Maud my Russian diary, & spent some time with her, Gwendolen, & 2 of the boys. このtownはロンドンを指している。マンズフィールド通り1番地にはRobert Arthur Talbot Gascoyne-Cecilの邸宅があった。ここに到る経緯は次のようである。セシルは第3代ソールズベリー侯爵で1870年6月25日にオクスフォード大学の総長に就任した。就任式に先立ってドジスはロシア旅行に一緒に行ったリドンを介してセシル夫人にこどもたちの写真の撮影を申し込んでいた¹²⁾。話は夫人からセシルへ伝えられ、6月23日にクライスト・チャーチ学寮のドジスの部屋には、侯爵のセシル自身と就任式で裾持ちを勤めるセシルの幼い男の子二人が家族と共に現れて写真を撮った。総長の就任式をその二日後に控えていた時期にセシルの日程の調整などの話がスムーズに進んだことについて、ドジスは『不思議の国のアリス』が役に立ったらしいと日記のなかで推測している¹³⁾。こうしてドジスにとってセシルと夫人、そのこどもたちとの交流が始まり、翌年、1871年7月18日には長女のベアトリクス・モード・セシル(1858-1950)へ「ロシア旅行記」を持って行き貸した。旅行の年から4年後のことである。さらに3年後の1874年11月13日には、セシルの次女 Lady Gwendolen Cecilのために、ロシア語の数字1から10までを行末に読み込んで韻文(A Russian's Day in England)¹⁴⁾を作り贈っている。

4. 「ロシア旅行記」より

ロシア旅行の当時ドジスは35才だった。初めて外国に出かける気分は日記の第1日目に窺える。7月12日、ドジスはオクスフォードを出てドーヴァーへ向かうためにロンドンに着いた。同じ頃トルコの国王もロンドンに着いて歓迎を受けていた。ドジスは、「国王と私は同じ頃にロンドンに到着した、ただ着いた所が少し違う。こちらの到着地点はパディントン、向こうはチャリング・クロス。群集は後者の所が極めて多かったということは認める。人目を惹いた第三の地点はマンション・ハウスで、ベルギーへの志願兵が接待を受けていた。」この「人目を惹いた第三の」によって、「人目を惹いた第二の」は了解済みの扱いを受ける。この種のヒューマーは書き手を誇大な尊敬の対象にすることで生まれる。

同行のリドンとは夕方ドーヴァーの宿で待ち合わせた。翌13日に出発直前の宿でとんでもない目に会う。「決めておいたとおり朝8時に朝食をした。というよりも、その時間には食卓に着いてパンを齧りながら肉がくるのを待った。これがそのまま30分続いた。周りでぶらぶらしている給仕に肉はまだかと穏やかに頼んでいる間は、宥めるように「ただ今、参ります」を繰り返し、こちらが強い態度に出ると、不当な扱いを受けたような不機嫌な声で「ただ今、参ります」を繰り返す。そのうち給仕はみな姿を消し、食器戸棚や皿蓋の下に隠れてしまった。それでも肉は出てこない。およそ給仕の美点のなかで雲隠れの気性ほどあるまじきものはない。リドンと私の見解は、この一点で一致した。ここにおいて私は二つの発議をした。いずれも即座に却下された。発議一、この席を蹴って、肉の支払いは拒否すること。発議二、店主を探し出し、給仕全員に対する苦情を言い立ててやること。それで大騒ぎになることは間違いない、だが間違っても肉は出てこないだろう。」

文教大学の共同研究助成を受けて現在編纂中の笠井・細井・下笠編「ド

ジスの日記-インデクス」によれば、7月13日の他に7月24日、8月6日、9月4日にも給仕の話がでてくる。困った目に遇ったときに、誇大に言い立て深刻な処分を想像すれば、可笑しさだけが残るので、こうして目前のことをやり過ごす姿勢がドジスのヒューマナーの根底にあった。

ロシア行きはドジスにとって特に目的があったわけではない。ドジスを連れていったリドンの方には、ロシア教会の最高権力者大司教¹⁵⁾フィラルイエットに面会し東と西の教会の統一に向けて意見を交換する目的があった¹⁶⁾。8月12日に行われた大司教との会談に同席したドジスは、会話の様子を次のように書いている。「午後、大司教館へいき、レオナイド司教から大司教に紹介を受けた。大司教はロシア語だけを話すため、大司教とリドンの会話(非常に興味深いもの¹⁷⁾)は、特異な方法で進んだ。大司教がロシア語で考えを述べ、それを司教が英語に翻訳した。リドンはそれにフランス語で考えを述べ、司教がリドンの返事をロシア語で大司教へ繰り返した。すなわち、二人だけの間で進んだ会話は3種類の言語でおこなわれたのである。」

旅行中には、ことばの問題がついてまわった。7月29日には、「今日は先ずペテルブルグの地図と小さな辞書と語彙集を買った。辞書は非常に役に立つに違いない」と書いている。続いて、馭者と馭賃を掛け合った自分の「初歩的会話」を記している。そのとき「私」が使ったことばは、「行き先」とドゥロシュキ(馬車)の料金を交渉する「数字」だけである。先ず行き先を告げるとロシア人の馭者が返したことばのなかの「3グロシェン」だけが聞き取れた。これは30コペイカである。「私」は、「20コペイカ?」では? と問い返すが、馭者はむっとして30だと譲らない。「私」は巖として20と言い張る。すると、「25?」ではと、やや折れてきた。「私」はこれ以上言うことはないという態度でリドンの腕を掴むと馭者を無視して歩きだした。ドゥロシュキがただらと後ろから付いてくる音がする。やがて「私たち」の脇に並んで、声をかけてきた。「私」は、きっぱりと「20?」にするのかと聞いた。すると、馭者は嬉しそうな笑顔に

なって、「へいへい、20で」。「私たち」は乗り込んだ。

思い通りになって「こんなことも一度くらいはよいが、ロンドンで馬車を雇う度にこれではかなわない」と、ロシア風の交渉には辟易している。

8月1日は、ピーターホッフへ出かけてペテルブルグに戻ってきたときに、同行した当日の案内役のメリリーズは数々の親切のうえさらに、「ドロシュキを雇い、馭者と不可欠の値段交渉をして安くさせるといって到れり尽くせりのことをしてくれた。われわれでは、夜の闇のなかで分からないことばを喋りまくる馭者連中に囲まれてはまったく不可能なことだろう」と書いている。8月2日には寝台車でモスクワへ向かった。到着後に市内を見て廻るのだが、ドロシュキの馭者はいつもより3割高く払えと譲らない。今日が皇妃の誕生日だ、というのがその理由であった。

8月15日には、ことばが通じない世界にいることがやや深刻味を帯びている。この日のうちにモスクワへ引き返すつもりで田舎の祭りを見に出かけた。想像したより遠方で、着いたら直ぐに帰りの馬車につける新しい馬を頼んでおいた。ところが、乗ってきた馬以外に新しい馬はいなかった。「仕方なく、われわれは運命に屈することになった。スパイア氏（ここまで同じ方角に帰るからと同行してくれた地元の人）には一緒にホテルまできてもらい、ディナーと夜食と部屋と朝3時の朝食とを注文してもらった。スパイア氏は、此辺ではどこを探してもロシア語を話す人しかいませんから、と先行き暗く念を押してくれた。彼が馬車で立ち去ったときには、ホテルの入り口に佇むわれわれは、旅行中これまで感じたこともない当て所なさ、ロビンソン・クルーソーの気分を味わっていた」。ここに形容詞Robinson-Crusoishが生まれた¹⁸⁾。

ことばの難儀はこれだけではない。8月5日にはモスクワから2泊3日でニジニへ行き、6日の夜にドジスはニジニ劇場で芝居を見た。リドンは宿に戻り、オクスフォードのコーパス・クリスティ・コレッジ出身のウェア兄弟の弟の方が一緒に見物した。「セリフは全部ロシア語で、ちょっと理解は無理だった。幕間の度にせっせと辞書を使って芝居のピラを読み、

内容についてはおおよその理解はできた」。最初の演目は「アラジンと不思議のランプ」で、これが一番よかった。ストーリーが分かっていたからである。それに比べて8月9日に、ウェア兄弟の兄の方と一緒にモスクワの「小劇場」で見た出し物は、「市長の結婚」(*Burgomaster's Wedding*)と「女の秘密」(*A Woman's Secret*)であった。小劇場とは言うものの大きい立派な建物で観客も多く、芝居は拍手喝采を浴びたが、セリフは全部ロシア語で、ドジスには「アラジン」ほどにおもしろくはなかった。

7月22日の朝にはダンツィヒに到着して、古い立派な町を見て歩き、ドムキルシュの教会の中を3時間、さらに98.5メートルもある塔の上から1時間かけてゆっくりと、古都全体の風景やモルダウ川、ヴィスチュラ川が遠くバルト海に注ぐのを眺めた。ホテルに戻るとホールの止まり木には緑の鸚鵡がいた。リドンとドジスは「プリティ・ポール」(*Pretty Poll*)と呼び掛けてみる。鸚鵡は頭を傾げて考える様子を見せるが、何も言わない。とうとう給仕がやってきて、「これは英語をしゃべらない、ドイツ語も喋らない」と教えてくれた。「可哀想に、メキシコのことばしか話せないらしい。鸚鵡にわかることばを話してやれないので、われわれはむやみとその鳥を気の毒がった」。

それから1と月ほど後に、リドンとドジスは鸚鵡と同じ目に会うことになった。8月22日に、地元にある英国系の教会で牧師をしているマクスイニーの招きに応じて、二人はクロンスタットへ出かけた。イギリス海軍小型砲艦ヴァルチャーに搭載されていた大砲が戦利品として飾ってある兵器庫を見学し、さらに建設中の造船所の内部を案内され、規模の大きさにエジプトのピラミッドの建設も斯くや、と感嘆する。マクスイニーの教会の鐘楼の上から眺める周辺の見晴らしも良かった。マクスイニー家で食事が終わると、主人は先の船に乗るために二人の客を残して出ていった。

「リドンは家に着いたときにオーヴァを預けておいたので、帰り際に女中から貰うことになった。彼女はロシア語を話すだけだった。私は辞書を置いてきてしまったし、持ってきた小さな語彙集にはオーヴァの単語は載

っていないかったため、難儀なことになった。リドンは先ず着ている上着を指しているいろいとジェスチャーをやってみた。上着を半分脱ぐ動作もやってみた。有り難いことに、女中は直ぐに了解したらしく、部屋を出ていくと、しばらくして戻ってきた。手には大きな洋服ブラシがあった。そこでリドンはもっと動きをいれて演技した。上着を脱いで、それを女中の足下に置き、下を指差し（下方に自分の求めるものがある、ということを示す）にしたら、喜びと感謝をもって受け取りたいという意味の笑みを浮かべて、それから上着を身につけた。不細工だが表情に富む若い女の顔に今一度理解の閃きが表れた。今回は前よりずっと時間が掛かった。手にして戻ってきたのはクッションと枕とで、われわれの落胆をよそにソファの上に昼寝の準備をし始めた。これが口のきけない紳士の求めているものと女中は了解しているのだ。その時好いことを思い付いた。紙にスケッチで上着を着ているリドンが別のもっと大きい上着をロシアの親切な農夫の手から受け取っているところを描いてみた。聖刻文字のことは他の手段が失敗に終わったところでも通用する。ペテルブルグへの帰途は、わが文明の水準も所詮は二ネベのあたりまで落ちぶれてしまったという自覚に打ち拉がれたのである。」エジプトの絵文字と古代都市とを引き合いに出して締め括っている。

5 印刷本とMS

1999年に英国のルイス・キャロル協会が出版した*Lewis Carroll's Diaries* Volume 5 は、大英図書館にあるドジスのMSのPrivate Journal 9に相当するが、このMSには入っていない「ロシア旅行記」を日付の順序に合わせて途中に挿入して編集している。すなわち、出発する前日1867年7月11日と帰国後の記録の間に入れている。

日々の出来事を調べる意味においては、これは便利な方法であるが、上述したように「ロシア旅行記」は、人に読ませることが念頭にあり、書き

手のトーンが平生の日記とは異なっているということ意識して読むのがよいだろう。「ロシア旅行記」には、そのどこを取り上げても entertaining な要素を見ることができる。

終わりに、笠井・細井・下笠編「チャールズ・ドジスの日記インデクス」の作成中に、MSのテキストと印刷本のテキストのずれについて気づいたことを挙げたい。これは印刷本になった Lewis Carroll's Diaries において、どこまでオリジナルのテキストに従うかの問題とも関わっている。

「ロシア旅行記」に関しては、次のようなことがある。

1. 引用符記号に関しては、MSには、二重引用符号とシングルの引用符号との2種類が使用されている。これらの2種類の符号は、印刷本では二重引用符号に統一されている。
2. 大文字、小文字の使用がランダムに変更されている。例えば、8月12日の、In the afternoon we went to the Bishop's palace は、MSでは小文字の palace を印刷本は大文字に変更している。
3. ドジスは、接続詞の and とアンパーサンド記号の両方を使い分けている。印刷本ではそれをすべて and に統一して書き換えている。
4. 7月12日、ドジスの記録では Charring X のところを、印刷本では Cross と書き変えている。
5. 7月25日にドジスは語を単数形のままで書いている¹⁹⁾。Lewis Carroll's Diaries vo.5 のテキストではそれを書き直しているのだが、テキストはそのままにして、脚注に入れておくことが望ましいであろう。
6. 8月6日、first-rates についてもダッシュがある表記のままとしておいてよいだろう。
7. 8月7日については、ドジスが列車の旅が長時間にわたり日付の感覚がなくなったのだ、として印刷本ではMSの日付8月7日を採用せずに、8月8日に変更をしているのだが、これも注において述べることに留めて、テキストの変更はしないことが望ましい。

8. 8月20日、in the Great MorskoyについてMSのMorskoyの綴り字は印刷本では-yを-iと変更しているが、脚注で断っておくのがよい。
9. 旅行の最終日、9月13日にイギリスへ近付いている船の上から、遠くに見える灯りを指して、MSはthe lights at the Dover, as they slowly broadened on the horizonと描写しているところを、印刷本はat the Doverの前置詞をofに変更しているが、そのことを、注に断っていない。テキストの前置詞の変更は意味合いに変化をもたらす。
10. 9月11日のMSには次の語句がある。As the Louvre is far too large an hotel for comfort, Page & I made a tour of inspection among a number of others... . 帰途、パリに滞在したドジソンは、hotelの子音hをフランス語に倣って発音していなかったようである。リドンの日記においては、モスクワの記録に、‘the commissioner took us to an Hotel close to the fair or rather in it’²⁰⁾があり、‘h’は発音しない習慣だったのかもしれない。
11. 8月14日の日記にはロシア語で、ドジソンはMSにmarajenoiと書いているが、印刷本はmarajenoiとなっている。

テキストの編纂においては、オリジナルのMSにあたって照合するということが必ずしも読むものに手軽にできることではないということを考慮する必要がある。したがって印刷本のテキストについては、変更した箇所を、注記して示すことが望まれる。

参考資料

- Tour in Russia プリンストン大学図書館所蔵、
Private Journals 大英図書館所蔵
Index to the Private Journals of Charles Dodgson 笠井・細井・下笠編
Russian Journal II, edited by Morton N. Cohen, 1979.
Life and Letters of Henry Parry Liddon by John Octavius Johnston, 1904.
The Princeton University Library Chronicle, Parrish Collection II, 1956.
Lewis Carroll's Diaries Volume 5, Lewis Carroll Society, 1999.
Lewis Carroll Handbook, edited by Williams & Madan & Green, revised edition by Denis Crutch, 1979, Dawson.

チャールズ・ドジスのロシア旅行記(2)

注

- 1) 1996年に女子短期大学部「英米学研究」第31号に第1部を発表。
- 2) 大英図書館で所蔵するMSは現存する9冊。
- 3) マイクロフィルムの入手にあたっては、August Imholtz, Jr. にお世話になった。
- 4) 1996年夏、英国のThe Lewis Carroll Societyの会長Anne C. Amor氏の協力を得た。
- 5) *Lewis Carroll's Diaries* volume 5, p.254.
- 6) 'purchases are made on general Library funds and on certain endowed English literature funds.' p.60, The Princeton University Library Chronicle, Parrish Collection II.
- 7) 筆者は1994年に、Firestone Libraryを訪れる機会を得た。主としてドジスが自分で撮影して作った写真アルバムをみた。
- 8) *The Lewis Carroll Handbook*, 56a. *Russian Journal* (1867) p.42.
- 9) Introduction, p.xiii.
- 10) この「共用の財布」はパリについて9月10日に取り止めた。
- 11) *Life and Letters of H. P. Liddon*, pp.11-13.
- 12) *Private Journal* No. 10, p.71.
- 13) *Private Journal* No. 10, p.71.
- 14) *The Russian Journal - II*, pp. 51-52.
- 15) bishop, archbishop, は日本では宗派によって、司教、主教と区別されるが、宗派の別に関係なく司教としておく。
- 16) He (Liddon) went, in fact, as an unofficial but undisguised emissary from Oxford and the High Church, and his private hopes mirrored the hopes of many contemporary English churchmen, that closer ties, perhaps unification, could be achieved with the Orthodox Church. For Liddon, the journey to Russia was a mission. *The Russian Journal - II*. 'Introduction p.15.
- 17) 会話の内容についてはドジスもリドンも記録していない。リドンがこの後に出した手紙には、大司教はトルコ国王を英国民が歓迎していることに対して、異教の長を歓迎することを遺憾とする、と述べ、リドンは英国では政治と宗教は別である事情を説明した、ということが書かれている。
- 18) OEDには出ていない。
- 19) 'I have met many gentleman walking about without gloves'
- 20) *The Russian Journal - II*, p.21.